

【概要】

本研究では富山市神明小学校区において子どもの安全を確保するために活動を行う主体として、小学校の教員・PTA・見守り隊の三者を取り上げ、危険箇所に対する各主体の認識にどのような差異があるのか明らかにし、その要因を解明することを目的とした。各主体への聞き取りから、小学校の教員と見守り隊が危険だと考える箇所は、概ね通学路上にあったのに対し、PTAが危険だと考える箇所は、通学路以外にもあり、主体間で危険だと考える箇所の位置に差異が見られた。また、各主体の捉える危険の内容には主体間で以下のような差異があることが明らかになった。小学校の教員は実際に発生し、注目された目に見える危険に対しては比較的対応しやすかったため、「過去に発生した事故の危険」を捉えていた。PTAは子どもの保護者であり放課後においても子どもの安全を気にかけていたため、「不審者や犯罪の危険」を捉えていた。見守り隊は一般的に年配者が務め、地域環境に関する経験が豊富であったと考えられるため、「経験的な危険」を捉えていた。各主体の認識を主体間で共有することができれば、各主体は、それまでは気がつかなかったが本当は気をつけておくべき危険が新たにかかるようになる。そのため、各主体の認識は共有することができればよいと考える。